

近代宮城の基礎もここになった。』

注(10) p. 123注(3)参照。

資料 府藩県制史（宮武外骨）

府県合併とその背景（林 正巳）

宮城県百科事典（河北新報社編）

56. 「けさらんばさらん」とは

問 「けさらんばさらん」とは、どんなものですか。

答 「けさらんばさらん」とは、10年周期位で話題に上ってくるもので、白粉を入れた小箱の中などに秘蔵されている、白い小さな毛玉のことです。正体が曖昧なだけに、却って神秘的な魔力をもつものとされています。この「けさらんばさらん」に関する資料には、次のようなものがあります。

1. 「仙台方言」（藤原 勉。「仙台市史」第6巻の内）

『ケサラ・バサラ

（廃語）ヘーサラ・バサラともいう。

仙台方言考（伊勢齋助）「けさらばさら 旧仙台中ニ御仲奥ト云フ女中共ノ詰所ノ部舎アリ
其女ドモ我身ノ榮達ヲ祈ル為メ玉手箱ノ内ニ秘蔵スル品ナリ物質ハ兎毛ノ玉ニ成リタル如キモ
ノナリ諺ニ云、大風ノ時、飛来ルヲ捕獲シテ置クナリト云フ」

昭和二十五年秋、岩沼の竹駒神社祭典の時、奥の院の狐の来る所に参詣したが、同行の天江富弥氏「今お稲荷さんがさっと飛び去った、ケサラバサラをおいていなかったか」とさがしていた。昭和二十六年二月、県史編さん常任委員只野淳氏の報告中、本吉郡馬籠村のキリシタン遺跡調査中、津谷町の一老婆からきいた話に、同女が一握りの茶っばい髪の毛の玉を持って居り、押すと中心が固く、ケサラバサラと唱えると動き出すという。また山蔦鶴治氏の談に栗原郡の同氏の伯母さんがそれを持って居り、白いフクサにつつんで秘蔵していたが、兎の毛の玉のようなもので、生きものであり白粉をたべものとして居り、これを所持していると福が来ると云って居り、誰にも見せなかったという。佐々木喜一郎氏（生物学者）の談によると、これは牛が身体をなめまわしているうちに口にはいった毛がたまりたまって一個の玉となり排泄されたものであり、求めようとしても容易にあるものではないから珍重されるのだが、別に用途があるわけではないという。山形県ではテンサラバサラという（佐藤先民氏・民間伝承十六ノ

一)、同じものらしい。これに類するものに龍涎香〔りゅうぜんこう〕というものがある。鯨の排泄物でフットボール大、海上に浮んでおり非常に香がよく、香の材料として珍貴にして高価なものであるという。』

『タمامスィ (廃語)

仙台方言考(伊勢斎助)「たまむし 旧仙台中ニ御仲奥トイフ所ニ女中部舎アリ其女トモ美顔トナル様ト化粧箱ノ内ニ秘蔵スルモノナリ。産地ハ磐城国伊具郡斗倉山神社境内ヨリ採捕ストイフ」、ケサラバサラと同じように用いられている。』

2. 「方言」(藤原 勉。「宮城県史」20の内)

『けさらーばさら

ヘサラーバサラともいう。仙台方言考(伊勢斎助)「けさらばさら 旧仙台中ニ御仲奥ト云フ女中共ノ詰所ノ部舎アリ、其女ドモ我方ノ栄達ヲ祈ル為メ玉手箱ノ内ニ秘蔵スル品ナリ、物質ハ兎毛ノ玉ニ成リタル如キモノナリ、諺ニ云、大風ノ時飛来ルヲ捕獲シテ置ナリト云」

本吉郡津谷村の一老婆が手のひらに握るとかくれるほどの小さな茶色の髪の毛の玉を持っており、押すと中心が固く、ケサラーバサラと唱えると動き出すという(只野淳氏報)。故山蔦鶴治氏の話に、栗原郡の同氏の伯母が兎の毛の玉のようなものを持っており、白いふくさに包んで秘蔵していたが、生きもので白粉をたべており、これを所持していると福が来ると信じ、誰にも見せなかったという。相馬市の岩崎敏夫氏が所持しているのを筆者は見たが、白い兎毛の玉のようなもので海綿のように柔かで毛の生えぎわが全然見えない、というよりも皮に毛が生えているようなものではなかった。これは、牛が身体をなめまわしているうちに、毛が口にはいりたまっって一個の玉となって排泄されたもので、求めようとしても容易に得られるものではないので珍重されるが、別に用途があるものではないという(佐々木喜一郎談)

日本各地にあるばかりでなく世界的なもので、中国では鮓答〔さとう〕⁽³⁾と言った。南蛮や印度から日本にはいつて来たものはヘイサラーバサラ(ペルシャ語)と言った。仙台地方でヘサラーバサラをケサラーバサラと言ったのは仙台地方のものは特に毛の玉だったからであろう。鮓答やヘイサラーバサラは結石といわれている。』

『たまむし (廃語)

仙台方言考(伊勢斎助)「旧仙台中ニ御仲奥トイフ所ニ女中部舎アリ其女トモ美顔トナル様ト化粧箱ノ内ニ秘蔵スルモノナリ。産地ハ磐城国伊具郡斗倉山神社境内ヨリ採捕ストイフ」。ケサラバサラのことであろう。』

3. 「ケサラン・バサラン考」(佐々 久。「仙台郷土研究」復刊第2巻第2号の内)

『先日テレビでケサラン・バサランが問題になっていた。粉おしろいを沢山入れた箱の中に毛球のようなものがいれてある。幸福のシンボルか、箱は宝物のように紫ふくさなどに包まれて神棚などにあげられている。』

何ものなのか、見る人々は不思議そうに眺め首をかしげた。私がこれを見た最初は十余年前本吉郡津谷であった。しかも三軒のものを一度に見た。古老の一人が「ケーサラ・バサラ」というのだ。古くから我家の宝物として伝えられたもので、「分家の一軒へ我家から大分前に分けたものがこちらだと聞いている」と話した。もとは二つだったが分けた後に各々二つに分れたという。

ケサラン・バサランはケーサラ・バサラが変化したものらしい。仏教辞典をひらいたらあった。「鶏薩羅・宝の名(慧苑音義下)に獅子身毛の旋文、呼んで鶏薩羅(ケイサラ)となす、西域宝あり、旋文あだかも獅子毛の旋形なるが如し、其に従って名となすのみなり」と。その後ケーサラ・バサラをよく見る機会がある。どうも狐の尾の先毛のようである。「縛日羅は跋闍羅、跋折羅、斫羅斫等に作り、金剛と記し斫伽羅、跋折羅ともかき力士執る所の杵、宝也」と、ある。「天台疏」に「斫迦羅は金剛輪宝にして杵とは多少制を異にす、後には諸魔降伏、碎破障礙の象徴として用いらるるに至る」と記している。

ケーサラ・バサラは共に宝とされるが、バサラは特に諸種の魔を降伏させる力ある宝という意味になる。こんな宝物が何時から宝とされ秘蔵されるに至ったものであろうか。

古今著聞集に知足院殿藤原忠実(一〇八三—一一六二)が茶吉尼⁽⁴⁾の法を祈らせて狐の生尾を感じ得たという。津谷のケーサラ・バサラは狐の尾と私は拝見した。狐の尾、やがて特に先の毛、施毛に魔力ありと見るのが始まり、狐の多かった時代に作られたものであろうか。

「おしろい」はもと鉛白であり毒性をもつ。鉛毒には微生物も生ぜぬ。狐の毛玉を保存するにはよい消毒薬であったろう。古人の智慧がこのしきたりを生んだものと思われる。鉛粉利用の粉おしろいの製造は江戸中期と見られる。有害な鉛粉の使用禁止は昭和九年である。すると鉛粉使用の粉おしろいを保存用とし、このおしろいを食べて生きていと思わせるに至った、魔よけの宝物ができた年代もほぼ察せられよう。船のある海岸、狐の多い山麓、ケーサラ・バサラは海岸から次第に奥地平野部に伝わりケサラン・バサランとよばれて魔よけの宝物としてひろがったものであろうか。毛のつき目がきれると二分し三分し、時には鳥の羽らしきものも加わって鉛粉おしろいの箱の中に数十百年も保存され今日に至ったものと思われる。』

4. 「本吉郡誌」(本吉郡誌編纂委員会)

『三月二十五日、岩尻村岩倉明神の祭日、参詣人帰途農家に立寄り「けさらはさら」を見る、毛のかたまつたような生物で白粉の中に生活している。』⁽⁵⁾

5. 「宮城県百科事典」(河北新報社編)

『ケサラバサラ

径6~7cmの白色または灰褐色の毛の玉をケサラバサラと呼んで保存する家があり、おしろいを食べて増えると語られる。「仙台方言考」によれば、城中の女中たちが栄達を願って手箱に秘蔵し、ウサギの毛の玉のようで、大風で飛んでくるのを捕えるとある。語源は「大言海」に

はポルトガル語のヘイサラバサラ (Pedra Bazoar) で、獣類の胎内に生ずる結石の意とある。気仙沼某家では、キツネが去った場所から拾ったといい、いずれ獣類がウサギなどを食い、その毛が胎内でフェルト状に固まり排せつされたものであろう。おしろいを食べるというのは形状からの連想で、増えるというのもお守りとして霊力を感じてのことである。馬の結石もまた同様視され、古代中国では鮚答と呼んで降雨の呪物とした。最近植物の冠毛を同類であるかのように言っているが、全く類を異にするものである。(三崎一夫)』

6. 大言海 (大槻文彦)

『ヘイサラ・バサラ⁽⁶⁾

鮚答〔葡萄牙語、Pedra bazoar、(獣類ノ胃腸内ノ結石ノ意) ヨリ出ツ〕』

『うまのたま

馬玉 馬、或ハ牛、羊、猪、鹿、豚、犬等ノ腹中ニ生ズル重クシテ、石ノ如キモノ。〔中略〕
軽キモノハ、中ニ黒色、又、褐色ノ毛アリ、けだまつ云フ。ヘイサラバサラ。ドウサラバサラ。
石糞。鮚答。』

7. 「和漢三才図会」巻第37 (寺島良安。正徳2年〔1712〕自序)

『鮚答 へいさらばさら へいたらばさる 二名共蛮語也〔下略〕』⁽⁷⁾

8. 「陸前の伝説」(三崎一夫)

『ケサラバサラ (本吉郡本吉町岩尻)

菖蒲沢の岩倉神社の祭日は三月二十五日で、この日参詣する者は、帰途近くの某家に立ち寄り、ケサラバサラというものをを見せて貰う。これは毛の固まりで、白粉の中に生きているという(本吉郡誌)。

ケサラバサラ (志田郡三本木町三本木)

某家にケサラバサラというものがあり、かつてこれを金を取って人に見せた。そのために当家は潰れてしまったという。

ケサラバサラ (黒川郡大和町吉岡)

某酒屋に、桐の小箱に納められた四個(一個は虫に食われて現在は三個)の白い毛の玉があって、ケサラバサラと呼ばれている。白粉を食べて生きているといい、オシロイバナから採った白粉が入れている。昔、どこからともなく当家の庭に飛んで来たものであるという。

かつて当家の近くに住んでいた某家にもあった。これは同町吉田の枳沢^{とびき}で木挽をしていたとき、どこからか飛んで来たという。』

9. 「階上よもやま話」(階上地区老人クラブ連合会)

『家宝ケサランバサラン

今より百二十四年程前の嘉永五年三月十二日最知村〔現在気仙沼市内〕梅の木幸作(初代)さんが、本業は大工さんでとても狩の好きな人でした。

その頃岩尻方面の現場に火縄銃をかついで通っていましたが、岩倉神社附近に近づくと度々狐の姿を見受けて、もしや神様の使いの狐ではあるまいかと思ひ撃ちませんでした。

ところがある日（三月十二日）神社の旗立場附近に行くと、何に驚いたか狐が地上五、六尺位高く飛び上りそして十間位行くと後を振り向き又繰り返しながら山の中へと姿を消しました。

幸作さんも驚いて、今迄とは違うので不思議に思いながらそこへ行ってみますと、真白な毛玉がありました。

幸作さんは、おれは狐を打たないためその恩返しに置いて行ったものかと心うれしく家に持ち帰り、すぐ桐の小箱を作って入れました。幸作さんがこの箱をながめながら、おれに鉄砲打ちをやめろとの事かなと思ひ、その後は絶対に鉄砲を打たない事に決心いたしました。

ところが四、五日を経て、白髪白ひげ白装束で来たお爺さんが、「おれは気仙のヒコロイチから来た者だ」と言って「この家では宝物を拾ったそうだが、それはケサランパスランと言う物で、とてもお白粉が大好きだからやってくれ、そうすれば火難盗難除け又子供の病気にも良いから。夜は絶対に出すな。女ばかりの時も出すな」と言ってお爺さんは立去ったという。ところが家内中はなんと不思議な人だと思ひすぐ後を追いかけてきましたが、どっちへ行ったか姿が見えなくなりました。それからというもの岩倉神社の祭典日の旧三月、六月、九月各々二十五日には神棚に供えて拝み、そして大工業に励んで梅の木初代として立派な生涯を送ったとの事です。

その後ケサランパスランは四方八方に広がり県内は勿論のこと、岩手県まできこえて五十年程前まで岩倉神社の参詣人が立ち寄り、何時の間にか自然に養蚕の神様として多くの方々に拝まれたものです。昭和になり、新聞又はテレビに写され、それがため、お宅のケサランパスランの様子は、と照会の手紙を五通位いただいております。その内一通をお知らせ致しますと、昭和三十二年十一月二十五日付宮城県柴田郡大河原町小山田教性院住職渡辺範了殿より「昭和三十二年八月二十日付河北新報拝読仕り、貴殿の家宝ケサランパスランの件について小納一言申し上げたく悪からず。小納大正八年横浜市福富町の炭屋にて見聞致しました毛玉は、狐の宝子玉として千匹の内一匹だけ生れながら尾の先の中において、この毛玉を持ちたる狐は、実に千化万化の法力ありて、人間が持っても実に得難き世の宝であります。狐も人間を馬鹿にする事度々あれば、その罪にておろします。尚昼寝してか又人間を見て驚きその時おちる事もあります。新聞にある如く実話です。なくした狐は人間にとらわれ、又は鉄砲にてうたれる事は犬と同様です。小納拝見致せし毛玉は風なくともふわふわして綿毛の如く、肉なくて毛より毛が出来あって、正に綿の如く白色でした。人間が持っても実に宝物です。尚昼夜見て、不幸の時は小さくなり、家盛んな時は丸々と太りふわふわしている事です。得難き宝玉どころではありません。世界の宝でありますこと、小納正に証明いたします。くれぐれも大事にして家宝として下さい」とのお手紙です。

実に百二十四年位にもなる毛玉は毛もぬけずに毛色に変化しながら、不思議ながらも生きている毛玉と信じております。』

10. 「さんりく処々風聞記」・「統豊田恵美治昔話」（西田耕三編）

『ケサラパサラ

気仙沼市階上岩月に「あら屋敷」（藤田新三郎氏宅）に珍しいものがある。

“魂消^{たまげ}たもの”として、むかしから他見を禁じているものだが、それは、灰色の毛の玉だ。野球ボールほどの大きさで、海栗^{うい}のような形状をしている。そしておしろいを食って生きている。江戸時代の「三才函会」にも、現代のいかなる博物誌にも、記載されていない不思議な生きものである。

四すみに穴のあいた小箱に収め、おしろいのかたまりを入れておくが、いつの間にか、そのおしろいは無くなっている。——つまり食べてしまうというのである。

これと同じものが、気仙沼市最知荒沢の「梅の木」（斎藤武二氏）宅にもある。この家にあるものには、県知事松平正直の筆で

生毛玉⁽⁸⁾

と箱書きされているというが、云い伝えにより「ケサラパサラ」と、呼びならわしている。

また、岩手県宮古市長根にある長根寺にもある。長根寺の四月の縁日には、水商売の人々が多く参詣し、その毛玉を「御玉尊」とよび、信仰している。時間を定めて、お玉尊を参観させるが、そのときは、声を立てると毛がとぶといい、三角に切った白紙をくわえて観る。ここの「お玉さん」は、子授け、結縁の功德があると信じられているが、むかし、旅僧が訪れこれを残して行ったという云い伝えがある。

長根寺は、草庵にすぎない小寺だが、ふるい歴史をもつ寺のようだ。この寺の上を館合というが、そこに一基の古碑があり、碑面に「永和二年〔1376〕一字一石雲公曳之」とするされており、古い歴史をうかがい知ることができる。』

11. 「けせんぬま口碑伝説散歩」（小山秋夫）

『けさらんぱさらん（階上・新月）

階上と新月の農家に「けさらんぱさらん」という得体の知れない、白い小さな毛玉が珍藏されている。兎の毛のようなものだが、毛の玉といっても、ただ毛を丸めたようなものではなく、毛が球状に生えたようになっていて、押すと中に軟かいシンのようなものがある。動きもしなければ鳴きもしないが、一年に何度か白粉を入れておくと減っているといい、“生き物”だとする根拠もここにある。

動物なのか植物なのか、生物なのか無生物なのか、得体が知れないというので、訳のわからないものの代名詞に使われもする「けさらんぱさらん」だが、階上の最知荒沢二四六農業斎藤徳三郎さん方のいい伝えから「けさらんぱさらん伝」を紹介しよう。

斎藤さん方の屋号は「梅の木」といい、六代前に大工をした幸作という人がいた。大工仕事の行き帰りにも狩猟をしたというほど狩猟好きな人で、仕事に出かけるときでも鉄砲を離さなかった。ある日のこと、岩尻（大谷）方面に仕事に行くため「岩倉さん（岩倉神社）」の側を通ると、大きな木の下に狐が一匹寝ているのを見つけたが、狐は「岩倉さん」のお使いだといわれていたので撃たずにそのまま通り過ぎた。一週間ぐらい経ってまたそこを通りかかると、またも狐が寝ていたので近づくと、狐は飛び上がるようにして逃げた。しかもその狐は五間ぐらい走っては振り向き、また五間ぐらい走っては振り向きしながら逃げて行くので、変だと思って狐の寝ていたところをのぞいて見ると、白い毛の玉が一つ残っていた。慌てた狐が人をだますときに使う玉を置き忘れていったのだろうと思い、家に持ち帰って大事にしまっておいた。それから何日か経って、気仙の日頃市から来たという白髪の老人が訪ねて来て、「あなたの家では宝物を拾ったそうだが、病難除けになる宝物だから、大事にしまっておくように」といい、「白粉を食べるからときどき入れておくように」と教えて立ち去った。そこでこれは狩猟をやめろという神のお告げと思い、この時以来、狩猟をやめ大工に精を出して働いたので、安泰な生涯を終えたという。

以来、斎藤さんの家では、これを家宝として代々伝えているが、これには、「女だけいたときは、出して見せてはいけない」とか、「夜出してはいけない」という禁忌がある。

また、「けさらんぱさらん」として近郷にその名が知れわたったので、旧三月二十五日と旧九月二十五日の「岩倉さん」の祭典のときには、これを見るため参詣帰りの人々がよく立ち寄ったといい、戦前までは、マユの神様と称して遠く気仙方面からお参りに来て、お賽銭をあげていったものだという。

長方形の桐の箱に入っていた「けさらんぱさらん」は、大きさ五センチぐらい。箱には「生毛玉」と書いてあり、箱の底には「嘉永五年三月十二日梅の木幸作」とある。これがこの「生毛玉」を見つけた日だという。大きさは昔と少しも変わらないが、徳三郎さんが若いころは純白だった「けさらんぱさらん」も昭和三十年ころから色が変わり、今では茶色に変わっている。

斎藤さん方の「けさらんぱさらん」が昭和三十一年一月に、三陸新報「わが家の自慢」で紹介されてから、これが市内に広く知れわたるところとなり、以来、この正体をめぐる論議は絶えないが、同じ階上の岩月寺沢九八、藤田徳太郎さん方では、子を生んで増えており、全部で十八個もある。

藤田さん方には、この由来についてとくに伝わっていないが、藤田さんがこの地に住むようになったのは、今から六代前、約百五十年前に火災に遭ってからのので、「けさらんぱさらん」が伝わるようになったのもその後のことではないかという。代々家の宝物として伝え、また、減った白粉は継ぎ足し、年に一度は虫干しもしている。大きさはさまざまで、七センチ位から四センチぐらいのものが七個、あとは一センチから三センチ大で、米粒大の毛玉に毛をつけた

小さなものも含めると、全部で十八個になる。色も純白なものが多いが、なかには薄茶色のものもある。

徳太郎さんの話によると、父重吉さんが、徳太郎さんが生まれた明治二十七年に数えたら十二、三個あったといい、徳太郎さんの代になって改めて数えたら十八個に増えていた。「けさらんぱさらん」が子を生んだという訳だ。そこでそれまで一つの箱に入れておいたのを、三つの箱に分けて入れているが、「けさらんぱさらん」が増えたという例がないのに、ひとり藤田さん方だけで増えたのは、二つ（ひとつがい）以上あったからではないかという。

生き物であれば死ぬこともある。階上牧通の近藤幸一さん(故人)はどこかで譲り受けた「けさらんぱさらん」に白粉も与えずに神棚に上げておいたら、いつの間にか毛が全部抜けて麦粒様のものが残った。同じ星谷の小松良一さんも、神棚に上げておいたら毛がバラバラになってしまった。つまり「けさらんぱさらん」が死んだという訳だ。

新月落合 四六、小松貞衛さん方には、祖父の貞吉さんが大正十二、三年ごろ、裏の畑で拾ったという「けさらんぱさらん」がある。近くのお年寄りに魔除けになると教えられて大事に保存しているが、一年に二、三回開けてみると白粉は確かに減っているという。このほか、松岩、新月、階上に各一件の所蔵例があるが、一件は一年ほど家において山に放したといい、他の二件はいつの間にかなくなってしまったという。

〔中略〕

また、「仙台方言考」によると、「けさらばさら」といい、仙台中の奥女中たちが自分の部屋の栄達を祈るため、玉手箱のなかに秘蔵した毛玉で、大風のとき飛んで来たのを捕獲したものだという。「宮城県史」の「方言」によると、「けさらばさら」あるいは「へさらーばさら」ともいうとし、本吉町と栗原郡にある「けさらばさら」の二例を紹介しているが、本吉町のある老婆の場合は、「けさらーばさら」と唱えると動き出すといい、栗原郡の場合も、生き物で白粉を食べており、これを所持していると福が来ると信じ、白いふくさに包んで誰にも見せないという。』

注(1) 「仙台方言」(堀田正敦著。〔堀田正敦についてはp.49注(2)参照〕)を大正五年伊勢斎助が増補註釈したものである。

注(2) p.16注(1)参照。

注(3) 蒙古人が雨乞いの祈りに用いる走獣の腹中から出た結石。大きなものは鶏卵大のものもあるという。

注(4) ここんちょもんじゅう。鎌倉時代の説話集。20巻30編。橘成季撰。建長6年〔1254〕成る。今昔物語集・宇治拾遺物語・江談抄・十訓抄〔じっきんしょう〕などの説話をも採り入れ、わが国の説話を題材別に分類して収録する。

注(5) 安永9年〔1780〕の「風土記書出」に『当村ハ往古平磯波路上長磯最知岩月松崎迄之本

郷ニ而大谷本郷ト申候由岩尻村ト申候儀者村之上ニ岩倉ト申山有之候ニ付是ニ取候名之由伝候年来等相知不申候事』とある。「シリ」はアイヌ語では高地・山・崖などの意だということから、「岩尻」は岩山即ち岩倉山を意味するといわれる。岩尻村は明治8年、平磯村と合併して大谷村となり、更に昭和30年3月30日、津谷町・小泉町と合併して本吉町となった。

注(6) p. 110注(4)参照。

注(7) わかんさんさいずえ。105巻(実数81巻)寺島良安著。和漢古今にわたる種々の事物を部分けし、図を付して漢文で解説した図説百科事典。正徳2年〔1712〕の自序がある。現在も復刻版2種行われ、資料価値不朽とされる。

注(8) p. 123注(3)参照。

資料 仙台方言(藤原 勉。「仙台市史」第6巻の内)

方言(藤原 勉。「宮城県史」20の内)

ケサラン・パサラン考(佐々 久。「仙台郷土研究」復刊第2巻第2号の内)

本吉郡誌(本吉郡誌編纂委員会編)

宮城県百科事典(河北新報社編)

大言海(大槻文彦)

和漢三才図会(寺島良安)

階上よもやま話(階上老人クラブ連合会)

さんりく処々風聞記(西田耕三編)

続豊田恵美治昔話(西田耕三編)

けせんぬま口碑伝説散歩(小山秋夫)

57. 「征車兼道」とは

問 「伊達世家家譜」の中に、「征車兼道」という語句が出てきます。どういう意味なのですか。

答 「伊達世家家譜」は、漢文体で記述されていますので、用語はすべて漢語であることを知らねばなりません。問題の語句は、⁽¹⁾「伊達世家家譜」にかなりの度合で現われますが、その中から一、二例拾って見ますと、巻13(平士の部)の「97村上」の家譜の中に『利福……宝暦四年〔1754〕
在江戸日奉使兼道三日而至于仙台……』、「99内崎」の家譜に『…隆利……会長松夫人之喪奉使
江戸征車兼道三日而至護送靈柩于大年寺……』とあります。⁽²⁾
⁽³⁾